

高島一本橋について

上総高島 弥久兵衛

近藤義彰

平成20年ころ

八幡史学館チーム

高島一本橋について

上総高島 弥久兵衛

近藤義彰



高島一本橋について

上総高島 弥久兵衛 近藤義彰

時代劇ふうに自営の我が家を紹介すると、「揮発油販売を生業とする拙宅は、茂原街道を挟んで住ま居が上総国市原郡 店屋は下総国千葉郡にて御座る」ということになる。

現在の正式な住所は市原市古市場、店舗所在地は千葉市緑区古市場町である。私が子供のころ、市原側は市原郡菊間村古市場、千葉側は昭和中期ごろまで千葉郡下古市場村とよんでいた記憶がある。とくに市原側は千葉側と区別す

るため「上古市場」または「高島」とも称したとの伝えが上総国町村誌に記録されているという。茂原街道を挟んで存在する「古市場」の地名は、古来、村田川の舟運が盛んで市場が開かれていたことにちなむと考えられている。私の少年時代、古市場は日常「高島」と呼んでいた。今でも居住地内外のお年寄のときどき「高島」と言ったり、「高島部落」と言う人がいる。この高島に川が流れていた。兩岸は竹藪が覆い被さり、その曲りくねりの川が「村田川」だった。市原市の北東部の隅、金剛地に源を發し、北流して千葉市に入り、同市緑区大木戸町地区で方向を西に転じ、再び市原市に入り高田地区を通過、草刈、古市場地区を経て八幡海岸地先の埋立地から東京湾に注ぐ全長20。

8 kmの川である。曲がり、くねりの激しい個所を地元の人には「しなんなり」と言って、水深が強く危険度が高かった。ので人は近寄らなかつた。とくに村田川は大雨が降るたびに氾濫して、両古市場地区では床上浸水、床下浸水、田畑冠水の被害を受けた家々が多くあつた。県道も水没して1 m位の深さになる所もあり、道路上を舟で通行したこともあつた。私の家も池のコイが全部さらわれたこともあつた。こんな状態だったので河川改修工事が行なわれて、今ではすっかり氾濫の被害は無くなつた。現在の村田町周辺では、上総、下総、二国の境界だったので境川ともいわれていたが、古市場では、（浜野く茂原間の千葉茂原線）のアスファルト上に敷かれた白線のセンターラインが、上総、

下総の分岐線になっている。かつて、この村田川に杉の大木をタテ割り真二つにして片方を横に寝かせて橋にした所があった。高島の集落に架けられたので地元の人には「高島一本橋」と名付けた。水面から橋までの空間の高さは約7mほど、兩岸までの長さは12m位、橋もとは太くて安心だが先に行くほど細くなり、渡るのに大変怖い思いをした。少年時代の懐しさをそる橋だった。高島一本橋の架かる道について古い文献で調べたことがあり、すこぶる驚いた。市原、古市場は千葉茂原線の主要地方道を堺にして千葉、古市場とともに水田と住宅が混在しているという地域形成だが、高島一本橋を渡る道筋が、市原の鎌倉街道であったことを知って認識を新たにしたのである。うれしいシヨツ

クだった。この鎌倉街道を昔の旅人が往来した。この道は安房国、国分寺（館山市国分）を発し、上総国、国分寺（市原市惣社）を経て高島一本橋を通過して下総に入り、大巖寺（千葉市）、千葉寺（同）から下総国、国分寺（市川市国分）、そして武蔵国江戸を通過して相模国鎌倉へ……徒（かち）で行く旅人が一本橋を渡る情景が浮かび、言い知れぬ気分を味わうことが出来た。

もう一つの驚きは高島にある二つの神社。治承二年戊戌（一一七八・平安後期の藤原時代）創建の「天神社」「八坂神社」の二社がある。治承二年というと当時の武将、平清盛（一一一八～元永一）より一一八一（養和一）が後白河法皇を幽閉して「治承のクーデター」（法皇の平氏封じ

込めに対する報復)を起こした前の年。この治承二年に千葉氏の臣、高島恒重が「天神社」と「八坂神社」を創建したというから「高島」の知名由来の謎が解けた気がする。

治承二年は千葉常胤(一一一八(案永7)〜一二〇一(建仁1)・平安末期)鎌倉初期の父千葉常重(一〇八三(永保3)〜一一八〇(治承4))が上総国大椎城(千葉市緑区大椎町)から下総国池田郷(同中央区亥鼻)の千葉城(猪鼻城)に移り、千葉開府してから半世紀ほど経った年。千葉開府は大治元年(一一二六)六月一日のこと。当時、常重は四十三歳、嗣子の常胤は八歳の少年だった。それから約半世紀、天神社と八坂神社が創建された。創建二年後の治承四年に常重が九十七歳で死去しているが、神社を創建した高島恒重は常胤の家臣だったことが推察される。古市場の今は、かつての村田川を軸とした河原や流れと戯れる子供たちの情景は全く見られなくなり、高島一本橋を知る人も少なくなつた。ただ一本橋の記念碑がポツンと建っているだけで、周辺には近代的な建物が軒を連ねている街に変貌した。

近藤義彰

